

「地方自治論：社会科学系好コラム」 選出1本!

香港人は何者なのか

香港人は自分たちのアイデンティティをどう捉えているのだろうか。1997年7月1日。1世紀半にわたるイギリスの植民地支配を終え、中国に返還された香港。この時、約束されたのが、「1国2制度」。50年の間、資本主義や言論の自由など、高度な自治が認められた▼返還時点から活動を続けている香港人アーティストは語る。返還された時点では世界から興味を失われることへの恐怖と、支配から解放された自由への希望、中国に回帰したという安心感などがあつたと。これは今の世論とは少々異なる。同時に、制度の転換と変わらない日常の狭間で、自分たちは結局「何者」なのかと疑問を持ちながら生きている。香港人のアイデンティティを規定するのは、我々が春にはお花見、夏には浴衣で花火を見て「日本っていいなあ」と思うように浅いことではない。中華圏の伝統と西洋文化が織り交ぜられ、一見するとただの混沌にしか見えないが、そこには絶妙なバランスがあり、完璧な比率があり、それらを保ちながら存在している、それがアイデンティティとも言えるのではないだろうか▼ところで、香港には多種多様な街がある。地震がほとんど無いため高層ビルが立ち並ぶオフィス街、返還当時から建て替えられることなく存在してきた数々の高層のマンション、ネオンが光り輝く下町、平家が密集する島村といった街並みは、我々の心を掴んで離さない。街並みは常に人と共にある。土地の狭さゆえにできたこれらの街並みは香港を象徴するものである一方で、皮肉なことに、地価高騰は世界でも一二を争う社会問題となっている。アイデンティティがアイデンティティを潰す構造が出来上がっているのである▼香港人のアイデンティティはどこへ向かうのだろう。異質を咀嚼し受け入れることを得意としてきた彼らが、今後現れる異質をどのように「香港」に組み立てていくのかを見守りたい。